

## 和文要旨

論文題目 魂落としの文学——目取真俊の小説におけるケアと環境の修復的想像力

氏名 黒沢祐人

本研究は、現代沖縄の代表的作家である目取真俊の小説作品を対象とし、作中で扱われるケアと環境の修復的想像力を分析することを通じて、これまで抵抗の作家として評価されてきた同作家の作品を、抵抗と生存の交差という複合的な観点から再評価したものである。

本文は、全2部で構成され、第I部に2つの章、第II部に3つの章が充てられており、序章と終章を合わせた全7章によって成り立っている。

まず、序章では、差別や暴力の日常化した社会を生きる人々を描く目取真俊の作品を、権力への抵抗の観点から論じるこれまでの研究の問題点を指摘した。先行研究では、作中に描かれた暴力が、本土との関係において癒しの表象を付与されることで不可視化されていく暴力的な社会構造を露呈させるものとして評価され、近年では、そのような議論が作中の暴力における抵抗の側面を注視したために、暴力を受けた被害者の傷の問題が論じられてこなかったことを批判する枠組みとして、他者の傷への想像力を通じた非暴力的な抵抗を論点とした研究成果が積み重ねられてきている。本研究はこの議論を引き継ぎつつ、戦後の沖縄で生活することが暴力と不可分であるとする先行論の指摘に着目して、自らが傷を抱えていることを前提としたうえで、なお他者の傷や痛みを想像することがいかにして可能であるか、という問題を提起した。とくに、目取真俊の小説の主要なテーマである戦争記憶の継承に関するこれまでの議論が、記憶の語りえなさという言語的な否定性を論じる枠組みを用いて作中の身体や傷を分析していたことを問題とし、目取真の小説に描出された傷ついた身体の多面的な側面をとらえるための視

座としてケアと環境に着目することの必要性を、本論文で扱う各作品に言及することを通じて提示した。

以上の問題設定をふまえ、第Ⅰ部では、「生存——生きのびるための魂<sup>マブイ</sup>落とし」と題して、傷を抱えた身体におけるケアと環境の修復的想像力についての議論を開き、目取真作品から「魂落とし」により生きのびる人々というモチーフを抉出することで、以降の分析の枠組みを提示した。

第Ⅰ章「食い破られた日常を生きる沖縄の少年——「魚群記」における生存としての抵抗」では、沖縄「返還」直前という時代における沖縄本島北部の農村に生きる少年を主人公とする小説「魚群記」を扱い、作中少年の性的欲望に着目した先行批評にみられる抵抗論の問題点を指摘した。具体的には、人種性差別的な男性性へ同一化する少年の姿を読み取り、その抵抗の失敗を指摘するこれまでの議論を批判的に検証しながら、本作が、差別や暴力が常態化した日常に依存する身体を前提とした少年による生存としての抵抗を描出するなかで、暴力的な情動に圧倒されずに距離をとるための環境的な想像力や、マブイを落とすことで日常を生きのびる解離的な身体を提示していることを明らかにした。その上で、この「魂落とし」という文化的想像力と、トラウマ反応を生存の視点から理解する心理療法にみられる臨床的想像力との交差に注目して、沖縄戦を生きのびた者たちが、語りえない記憶を想起するなかで、断片化した傷としてのマブイを抱えなおしていく姿を目取真作品に読み取るための枠組みを整えた。

第Ⅱ章「テロ、あるいはケアとしての糞便——「平和通りと名付けられた街を歩いて」におけるトラウマ身体とケア」では、沖縄戦を生きのびた老婆による皇族車両への人糞のなすりつけ行為を描く小説「平和通りと名付けられた街を歩いて」を扱い、トラウマ身体とケアの観点からテキストを読み直すことで、これまでテロ行為とされてきた老女の行為を読みかえることを試みた。ここでは前章に引き続き、身体と空間の関係に着目して、本小説が身体の応答性を通じて「平和通り」を描出していることを分析したのち、マブイを落として生きる老婆のトラウマ身体が、復讐のための暴力ではなく、戦場で救えなかった息子を現在において救いなおそうとするケア行動を反復していることを明らかにした。そのうえで、主人公の少年と老婆とのあいだで継承されるケアの身体性について注目し、これまで苦しみや痛みに着目して論じられてきた語りえない戦争記憶の継承の問題を、弱さに応答する身体記憶の継承という観点から論じる必要性を提起した。

次に、第Ⅱ部「現場——ひとつひとつの傷<sup>マブイ</sup>とともに生きるために」では、個別の記憶の語りえなさに着目して戦争記憶の継承を論じる読解からの転換を試みるべく、目取真作品に描かれたケアと環境に依存する身体が生きる関係の広がりに着目した読解を展開し、落とされたマブイとしての傷を、日々の生活のなかで抱えなおすための修復的な想像力について検討した。

第3章「依存とケアの水——「水滴」における戦争記憶の現場性」では、これまで共同体による記憶の継承からとりこぼされる個人の記憶の語りえなさに着目して読まれてきた小説「水滴」を扱い、本作が、沖縄戦の生存者が、戦後50年ものあいだ欠落していた傷としての記憶を回復していく姿を描くことを通じて、自身の弱さを受け止めて生きるための関係としての可傷性のネットワークを描出していることについて検討した。具体的には、主人公の想起する戦争記憶が、戦場で頓挫したケアのやり直しであることに着目して、その想起のプロセスを、戦場および戦後を生きるなかで断片化した情動、すなわち、かつて落としたマブイを抱えなおす修復的想像力の観点から読みなおした。その上で、そのように自身の傷を抱えなおす過程そのものが、マブイを落として動くことのできない主人公の身体をケアする現場の人々との関係に依存していることに注目して分析をすることで、同作が、語られない記憶を生きる戦争体験者の身体を、依存とケアの観点から想像することで戦争記憶の現場性を提示していることを明らかにした。

第4章「マブイを落とすことのできる浜を歩いて——「魂込め」における戦争記憶とケアの〈現場〉」では、「水滴」にみられたような依存とケアの関係を描出する際に、目取真が人間だけでなく、土地や動植物、人間以外の存在を組み入れていることの意味について考えるべく、村の浜辺でマブイグミと呼ばれる伝統儀式を行うなかで自身の戦争記憶を想起する老女ウタの姿を描いた小説「魂込め」を扱った。ここでは、戦争記憶の想起という行為が、対象化されることのない様々な「環境的なもの」に依存して成立していることを可視化する枠組みとして〈現場〉という読みの枠組みを提示し、とくにこれまでの戦争記憶の継承をめぐる議論で否定的に評価されてきた解釈という行為を、ケアとして生きられる、関係としての解釈という観点から再評価した。また、「魂落とし」という病いを個人のものとしてではなく、他者とともにいることに気づいていく依存とケアの関係の形成過程であると考え、そのような〈病い〉を日常として生きることを通じて傷をかかえなおしていくウタが、その生活の反復のなかで自らの伝統的な世界観をしだいに組みなおしつつあることを明らかにした。

第5章「マブイの群れとして生きること——「群蝶の木」における〈群生〉あるいは「生存としての記憶」」では、小説「群蝶の木」を扱い、同作が、前章で論じた〈現場〉をさらに身体の内部に浸透する想像力として描出していることについて検討した。具体的には、他者の傷への想像力を問う枠組みとしてこれまで聞き手／読み手の問題が論じられるなかで、性暴力の「被害者」として位置づけられてその記憶の語りえなさが指摘されてきた元「慰安婦」ゴゼイの語りを、「生存としての記憶」の観点から読みなおした。これにより、語られない記憶を抱える彼女の語りが、無数の記憶の欠片を群れのように想起して自己の欲望を修復する〈群生〉の語りとして表現されていることを明らかにした。また、「認知症」という病いを抱えながらも、

以上のような記憶の実践を通じてゴゼイが現在の状況に応答するプロセスを分析することで、これまで暴力的な出来事の到来という受動性から理解されてきた戦争記憶の問題を、今ここを生存するため記憶の問題として論じなおした。最後に、本作にみられる群蝶をめぐる沖縄の文化的想像力を、「ハジチ」と呼ばれる刺青文化にみられる「変形の思考」の観点から考察するなかで、不安を抱えて自死に至った戦後沖縄の若者の姿と、性暴力と差別を受けてなお生きつづけたゴゼイとの作中での対比に注目し、戦争記憶が〈現場〉として継承されることの意義について言及した。

終章では、これまでの議論を総括したうえで、本研究によって新たに開かれたケアと環境の修復的想像力という観点から、目取真の長編小説「眼の奥の森」を中心に、本論中で扱うことのできなかった目取真作品にも触れながらさらに検討した。具体的には、「眼の奥の森」に描かれた性暴力の被害者小夜子の生存と、その小夜子との依存とケアの関係を生きる妹タミコの抱えた傷に注目し、傷を抱えた人間が他者の傷への想像力をいかにして獲得しうるかという問題について言及した。次に、「軍鶏」や「希望」といった作品にみられる衝動的な暴力行為が、傷を抱えた者たちによるトラウマ反応であるという観点について言及したうえで、いかにしてそのような行為に至ることなく、暴力の情動とともに生きることが可能かという論点をあらため提起するなかで、「眼の奥の森」の盛治が戦後沖縄で生きる姿を本作が多声的な語りによって表現していることに着目し、その語りを暴力的な情動を抱えながら今ここを生きるための生存の語りであると論じた。最後に、精神科医であったフランツ・ファノンの臨床的言説にみられる、解離した複数の私たちとの共闘のモチーフに触れることを通じて、本研究が目取真文学を「魂落としの文学」として読むなかで構築してきた読解の枠組みの射程が、セラピーとポストコロニアルの交差域へと向かうものであることを提示した。